

目次	■第17回年次大会特集	2
	大会を振り返って…2 基調講演…4 プレカンファレンス…5	
	公開シンポジウム…5 パネル・ディスカッション…7	
	学際シンポジウム…9 20周年記念事業セッション…10	
	石井奨励賞審査結果…11 第18回年次大会…11	
	■2018年度理事会議事録抄録	12
	第1回理事会…12 第2回理事会…14 第3回理事会…16	
	■地区研究会報告	19
	北海道・東北…19 関西・中部…21	
	広域（中国・四国・九州）…28	
	■地区研究会案内	30
	関東…30 中国・四国…31	
	■お知らせ	31
	Web管理・広報委員会より…31 学会誌編集委員会より…32	
	事務局より…33 新入会員紹介…34 会員新著紹介…35	
	NL委員会より…35	
	■編集後記	36
CONTENTS	■Report on the 17th Annual Conference on Japan Society for Multicultural Relations	2
	Overview of the 17th Annual Conference on Japan Society for Multicultural Relations…2 Keynote Speech…4	
	Pre-conference…5 Symposium…5	
	Panel Discussion…7 Interdisciplinary Symposium…9	
	20 th Anniversary Memorial Project Session…10	
	The Ishii Yoneo Award…11 JSMR 2018 Annual Conference…11	
	■Records of the 2018 Board Meetings	12
	■Reports from the Regional Study Meetings	19
	Hokkaido・Tohoku…19 Kansai・Chubu…21	
	Chugoku・Shikoku・Kyusyu…28	
	■Announcements on the Regional Study Meetings	30
	Kanto…30 Chugoku・Shikoku…31	
	■Announcements	31
	From the Web Committee…31	
	From the Journal Editorial Committee…32	
	From the Business Office…33 Introducing New Members…34	
	New Publications…35	
	From the News Letter Committee…35	
	■Editor's Notes	36

多文化関係学会第17回年次大会（名古屋）を振り返って

第17回年次大会準備委員長 笠原 正秀(椋山女学園大学)

名古屋で開催された2018年度年次大会は「ものづくりの地域 東海で考える多文化共生の最前線-多文化関係学の視点から-」のテーマのもと、東海三県（愛知県・三重県・岐阜県）に静岡県を加えたこの地方の抱える多文化共生の現実と、それを支える企業と地方自治体の施策や取り組みを考え、発信する大会となりました。プレカンファレンスを含む3日間の日程を無事終えることができ、会員のみならずはじめてとして、一般の方々にも多数参加いただきましたこと、この場を借り、心より御礼申し上げます。

名古屋という地の利を生かし、地方大会としては一番の参加者数になるのでは？という前評判をいただいておりますが、思いの外、事前参加申込者数が伸びず、準備委員は皆、冷や汗ものでした。最終的には会員・非会員（一般公開企画への参加者）を含め、120-130人ほどの参加をいただくことができ、ホッと胸をなでおろしています。また、懇親会にもたいへんたくさんの方々に参加をいただきました。ありがとうございました。

大会前日、プレカンファレンスとして、在日フィリピン人の子供たちが通う、国際子ども学校（ELCC）を訪問し、その後、名古屋国際センターに場所を移し、フィリピンを文化的背景に



もつ学生（椋山女学園大学から2名、名古屋外国語大学から1名、計3名）をパネリストにトークセッションを行いました。いかに多文化共生の現実が、この地方の喫緊の課題となっているかを感じさせる、その入口となるようなプレカンファレンスとなりました。

大会初日、最初の企画は「タイのノンフォーマル教育の実情と課題」と題し、タイ教育省のプラユット・ラックム [Prayut Lakkum] 氏を講演者に、一般公開シンポジウムが開かれました。プレカンファレンスに続き、多文化共生社会に求められる教育のあり方を問うものとなりました。同時進行で、7本の研究発表も別会場で行われ、さまざまな視点から多文化共生・異文化適応・異文化コミュニケーションを考えることができました。

基調講演は池上重弘氏（静岡文化芸術大学副学長）をお迎えし、「地域の国際化と多文化共生のフロンティア：東海地方に着目して」の演題のもと、示唆に富むお話しをうかがうことができました。著名な方のご講演でもあり、一般（非会員）の方々も多数参加されていました。この地域の方々への貢献という意味で、非常に意義ある基調講演となりました。

その後のパネル・ディスカッションでは、「日本企業における外国人社員のキャリア形成の現状と課題-外国人社員・日本企業・研究者の



懇親会にて
後藤学長（椋山女学園大学）と基調講演者 池上重弘氏

視点から-」と題し「外国人労働者（鄭学京氏、矢崎総業株式会社）」「企業人事担当者（長崎洋二氏、ナガサキ工業株式会社代表取締役）」「研究者（石黒武人氏、武蔵野大学）」の各視点からのご発言をもとに、フロアとの活発な議論が展開されました。

初日最後の企画として、通常のポスターセッションと同時進行で「多文化共生と防災・災害の取り組み」と題したテーマティック・ポスターセッションを開催しました。本大会のテーマのもと、防災や災害を切り口に地方自治体の取り組みや施策を紹介・検討するものでした。就労や教育の問題のみならず、災害時の対応や防災といった観点も織り込み、多文化共生のあり方を網羅的にとらえるものとなりました。



懇親会にて
椋山女学園大学の学生による演奏

大会2日目（最終日）の午前中、7本の研究発表が行われました。外交・移民問題から異文化感受性といったミクロな研究に至るまで、幅広く国際や異文化を考えるものとなりました。また、研究発表と同時進行で、本学会創設20周年記念事業の一環でもある、「スペキュラティブ文化研究-『面白すぎる！』文化研究を目指して-」が行われました。小グループに分かれ、活発なやり取りがなされていました。会場担当の学生スタッフも各グループに混ぜてもらい、議論に参加していました。とっても良い刺激になったようです。

大会最後の企画として、「実践から考える多文化共生の地域づくり-教育・福祉・防災-」と題し、3人のシンポジスト（伊東浄江氏：NPO法人トルシーダ代表、葛冬梅氏：多文化防災ネットワーク愛知 名古屋代表、後藤美樹氏：フィリピン人移住センター [FMC] 事務局スタッフ・外

国人ヘルプライン 東海代表）をお迎えし、その実践例と取り組みをご紹介いただきました。

当該の企画も一般公開されており、会員のみならず、一般の方々が多数参加されていました。この地域の方々の多文化共生に対する関心の高さをうかがい知ることのできるものでした。また、同時に、一般の方々にこうした場を提供できたことも、学術団体の地域社会への貢献という意味で、たいへん意義あるものであったと思います。

プレカンファレンスを含む、3日間にわたる年次大会をつうじ、現在、国会でも議論の対象となっている外国人の就労に関する法律上の問題、行政上の問題、それぞれ当事者の方々が現場で直面することになるコミュニケーションの問題、日本文化・日本社会への適応の問題、そしてその子供たちの教育の問題等々、各研究成果の報告や各地方自治体の取り組み、実践例の紹介など、会員のみならず、大会を広く一般に開くことにより、啓もう活動の一端を担うことができたことも、大会の成果としてたいへん大きいものがあると考えます。また、地域に密着した形で、日本という国家レベルで取り組まなくてはならない、こうした問題を本学会の年次大会の中でいち早く取り上げることができたこともたいへん誇らしく思っています。

最後になりましたが、本大会の企画から運営に至るまで、多大なるご協力をいただきました大会準備委員のみなさん、そしてこの大会の陰の立役者でもある学生アシスタントのみなさんに心から感謝いたします。ありがとうございました。



学生スタッフ
椋山女学園大学の学生と東京福祉大学大学院の留学生

基調講演

「地域の国際化と多文化共生のフロンティア:東海地方に着目して」

【講演者】池上 重弘 氏(静岡文化芸術大学副学長、文化政策学部教授)

【コーディネーター】近藤 大祐(公益財団法人名古屋国際センター)

法務省が公開している『在留外国人統計』によると、2017(平成29)年12月末現在、およそ256万人の外国人が日本に暮らしている。そのなかでも、静岡県を含む東海地方は永住者や定住者をはじめとする身分資格をもつ外国人が多く、定住志向が見受けられる地域である。今回の基調講演では、静岡県をメインフィールドに研究および実践に取り組まれている池上重弘氏をお招きし、東海四県のうち、とくに愛知県と静岡県に焦点を当て、国際化の様相と外国人住民を取り巻く状況などを俯瞰したうえで、多文化共生の地域づくりのフロンティアを描き出すことを目的にご講演いただいた。

はじめに、2017(平成29)年12月末のデータをもとに国籍や在留資格などから全国と東海四県の動向を比較し、東海地方における在留外国人の特色を明示した。永住者、定住者、日本人の配偶者などの身分資格を有する者の比率の合計は全国56.0%、東海四県は67.2%と、東海四県では在留外国人の約3分の2が身分資格であり、全国と比して永住者や定住者が多いことなどが指摘された。

次に、多文化共生の取り組みとその現状についてお話いただいた。日本における多文化共生政策は欧米における社会統合政策にほぼ重なり、政策の課題群の類型化がなされた。すなわち、(1)雇用対策や労働保険制度などの労働政策、(2)医療や年金、生活扶助、住宅保障などの社会保障政策、(3)子どもに対する教育や大人に対する公用語習得教育などの教育政策、(4)人権尊重や異文化理解促進など受け入れ社会側に対する政策である。さらに、ここでは、東海地方における多文化共生の諸課題として、間接雇用などの不安定就労、子どもの教育をめぐる対応の進展やムラ、高齢化に伴う無年金や介護についてなどの課題が挙げられた。また、静岡県多文化共生基礎調査2016をもとに、外国人住民に対する日本人住民の意識について取り上げられた。



多くの日本人にとって、外国人との接点は少なく、間接な情報をもとに、身近な外国人を偏見のままざしで眺めていることが多い一方で、日本人住民との交流に前向きな意向を有する外国人が多いとされ、具体的接点をいかに作るかということが課題として指摘された。加えて、今日の日本政府の動向に着目し、長期に渡る滞在で地域に暮らす外国人が増え、地域との接点づくりが一層肝要になるであろうとお話いただいた。

最後に、親の移住に伴い日本で暮らす、いわゆる「第二世代」の定住外国人の若者に焦点を当てた。グローバル人材として、その能力を発揮し国内外問わず活躍する、教育達成を果たした第二世代の若者が見受けられるようになっている。一方で、教育からこぼれ落ちて大人になり、社会で周辺化している若者もおり、両極のギャップがこれまで以上に広がる様相が浮かび上がった。第二世代の若者のなかには、同じ境遇の子どもたちを支えたい、自分が暮らす地域に貢献したいといった思いをもつ者もいる。日本で育った第二世代の若者たちが日本人と外国人をつなぐ役割を果たす、今日迎えている多文化共生の地域づくりの新たな展開に期待しつつ、基調講演は締め括られた。

報告者:近藤大祐(公益財団法人名古屋国際センター)

プレカンファレンス

「未就学の在日フィリピン人の子どもが通う国際子ども学校訪問」

【コーディネーター】宇治谷 映子(名古屋外国語大学)

雨模様の中、総勢30名近くの学会員の皆さんと就学前の在日フィリピン人の子どもたちが通う「国際子ども学校 (ELCC)」を訪ねた。最初15人程集まればと計画をしたプレカンフェレンスであったが、予想を大きく上回る申し込みがあり急遽会場を会議室から和室に変更し、リラックスした雰囲気での幕開けとなった。最初校長の谷さんから配布された資料に基づいてELCCの成り立ちや運営形態について説明があった。次に教頭のネストールさんに参加者の質問に答えてもらう時間を設けた。前もってフィリピンルーツの子どもたちを支援する教育機関についてのビデオを見てもらっていたためか、活発な意見交換が行われた。ネストールさんからELCCには移住労働者の子どもたちが多く、人数が定着しないのが悩みの種だという話があった。学校は必要とされる限り続けたいが、このような在日フィリピン人の子どもたちの学校が必要とされなくなることも喜びという言葉が印象的であった。

プレカンフェレンスの後半は名古屋国際センターに場所を移し、フィリピンにルーツを持つ

地元大学生とのトークセッションを開催した。前半にフィリピンにルーツを持つ子どもの教育に長年関わっている矢元学会員から「フィリピンにルーツを持つ子どもたちを取り巻く状況」についての概説があり、後半は3名の学生登壇者に、インタビューをするという形で進められた。フィリピンにルーツを持つ大学生といっても、両親の国籍や、家で使う言語、本人が来日した時期も3人3様で、それに伴い経験も多様で非常に興味深かった。子どもを叱るときだけタガログ語を使う母親の口調を真似た学生が、バイリンガルの別の学生に初めて意味を教えてもらうという笑いを誘う場面もあり、あっという間の1時間半であった。

トークセッション終了後は数名の参加者とELCCの子どもたちが多く居住している繁華街まで足を伸ばし、家庭料理をフィリピンレストランで味わった。頭のみならずお腹までフィリピンで満たされたイマージョンプログラムであった。

報告者：宇治谷映子 (名古屋外国語大学)

公開シンポジウム

「タイのノンフォーマル教育の実情と課題」

【講演者】プラユット・ラックム 氏(タイ教育省ノンフォーマル・インフォーマル教育局)

【コーディネーター】馬場 智子(岩手大学)

本シンポジウムでは、タイ教育省ノンフォーマル・インフォーマル教育局のプラユット・ラックム氏を招聘し、タイ国内の興味深い教育実践およびその理念をオーディエンスと共に共有した。先に結論を述べると、教育にアクセス

が困難なタイ国内に在住する人々のため、タイ中央政府の主導で、各小地区にノンフォーマル教育・インフォーマル教育の場を提供しているといった内容が報告された。

まず、シンポジウムの内容に入る前に、ノンフォーマル教育・インフォーマル教育について簡潔な説明を行う必要がある。公的資金が投入され審査を受けた教科書やリジットなカリキュラムを用いる公立学校等で実践されるフォーマル教育とは異なり、ノンフォーマル教育は基本的にNPOやボランティア組織等が主体となり多様なニーズに合わせた独自のカリキュラムとプランを作成し、学習者に提供するものである。また、インフォーマル教育は、カリキュラムやプラン等はなく、日常の家族や友人との関わり合いの中で多様な学びを得ていく機会の事である。タイにおいては教育省という中央政府のレベルで、地域の教育的持続性を支えるノンフォーマル教育・インフォーマル教育が実施されている現状がある。そして、その新しい試みがなされていることに対し、まず日本に住んでいる人々は驚くだろう。

プラユット・ラックム氏によると、タイでは中央政府が主導となり「ストリートチルドレン、受刑者、労働者、障害者、徴兵されている人、貧困層、高齢者、農民、山岳民族、遠隔地の農民、タイのイスラム教徒、スラム居住者等々」を対象とした幅広い教育プログラムを全ての小地区に波及させているとの事であった。そして、各小地区には、「地域学習センター」や「コミュニティデジタルセンター」等、無料で学び



にアクセス可能な環境を全ての人に開いている現状が報告された。日本国内では、未だにこういったフォーマル教育以外の学びの多くは地方自治体の努力に委ねられているのが現状であり、中央政府主導で取り組むタイの現状は参加者にとっても大きな刺激となったことは間違いないだろう。

さらに、日本の名古屋市ように地方に財源があり、多文化教育に関わるプログラムを提供している実態と比較し、タイでは地方の財源に委ねては質の平等性が確保できない点がプラユット・ラックム氏から指摘された。本シンポジウムの前日に名古屋国際センターを見学していたプラユット・ラックム氏ならではの比較教育的な視点も、我々にとって重要な学びであった。

タイ教育省との連携は、本シンポジウムのみで絶やすことなく、今後も継続的な情報交換を積極的に行っていくべきであると考えている。そのためには、日本国内の先進的な実践をタイに紹介し、また、タイからも中央政府としてノンフォーマル教育・インフォーマル教育に関わることの利点の多くを学べるようにしていきたい。将来的に、日本とタイの教育的な繋がりを更に発展させていきたいと強く感じている。

報告者：奴久妻 駿介（一橋大学博士後期課程）



パネル・ディスカッション

「日本企業における外国人社員のキャリア形成の現状と課題 —外国人社員・日本企業・研究者の視点から—」

【パネリスト】鄭学京氏(矢崎総業株式会社 生産技術室)

【パネリスト】長崎洋二氏(ナガサキ工業株式会社 代表取締役)

【パネリスト】石黒武人氏(武蔵野大学)

【コーディネーター】内藤伊都子(東京福祉大学)

パネル・ディスカッションでは、「日本企業における外国人社員のキャリア形成の現状と課題—外国人社員・日本企業・研究者の視点から—」と題し、日本の大学を卒業後、日本で就職してキャリアを形成している外国人社員の立場から、矢崎総業株式会社社員の鄭学京氏に、外国人を雇用している日本企業の立場から、ナガサキ工業株式会社代表取締役の長崎洋二氏に、異文化コミュニケーションを専門とし、近年は国内企業の多文化チームにおける日本人リーダーなどをテーマとしている研究者の立場から、武蔵野大学准教授の石黒武人氏に、それぞれパネリストとしてご登壇いただきました。

まず鄭氏より、キャリア形成において夢を実現されたライフストーリーについてお話いただきました。入社当時は、「中国人」や「外国人」というよりも「新入社員」として扱われたため、仕事上の試行錯誤が許されたことや多様性を受け入れている社風の中で、日本流の仕事覚えていったとのことでした。約2年半の勤務の後、鄭氏は長年の夢であった中国に駐在するという機会を得て、上海支社に赴任しました。そこでは、日中両言語が活用できたため、日本人駐在員よりも早く仕事を覚えることができたため、中国人社員と日本人社員との間に立って積極的にコミュニケーションを図ったり、問題解決に努めていたことなどが語られました。コミュニケーションの手段としてゴルフを始めたのも、駐在員時代とのことでした。現在は約5年半の出向期間を終え、日本に帰任していますが、課題はいかに自分が持っていることを活かして



最大限に会社へ貢献できるか、とのことでした。そのために、職場での人間関係において仲間からの信頼やグループの一員としての意識、自らの行動力が重要であるという力強い言葉が印象的でした。まさにグローバル人材として、今後も更なる活躍を期待させてくれるお話を伺うことができました。

次に長崎洋二氏より、中小企業の代表として、ナガサキ工業での外国人採用状況や快適で外国人にとって居心地の良い会社になるための取り組みについて、写真や映像なども交えながらご紹介いただきました。ナガサキ工業では現在、従業員数約200名のうち、外国人は中国人やベトナム人、アメリカ人など15名が正社員として採用されており、他に約30名の技能実習生が働いているとのことでした。外国人の正規採用は10年以上前から行われており、年々増えているとのことですが、新卒時や事業拡大時に優秀な社員を採用したところ、外国人だったということです。会社としての取り組みは、対外的にはホームページを多言語化し、国際的な会社のイ

メージ作りや外国人採用と海外取引の確保に結び付けたり、対内的には社内書類を多言語化し日本人上司の負担を軽減したり、日本人社員に対する異文化教育などを行っているとのことでした。一方、外国人社員に対しては、住居などの生活支援や日本語教育、ビジネスマナー研修などの教育制度、将来のキャリアプランまで面接時に確認し考慮されているとのことでした。



長崎氏からは、中小企業が抱える問題や外国人の採用の厳しさなどもご提示いただき、企業の意識改革の必要性についてご説明いただきました。そして、人材不足が深刻化する中小企業と日本で就職を希望する外国人という両者の現状を踏まえ、長崎氏が2017年8月に設立した“グローバル愛知”という非営利団体についてもご紹介いただきました。グローバル愛知は、人材不足解消や外国人材の就職率向上をミッションとし、企業向けと留学生向けのサービスを提供するなど、両者の可能性を見出す幅広い活動を展開していることを伺い知ることができました。

最後に石黒武人氏より、異文化コミュニケーションの観点から、外国人社員のキャリア形成における日本人上司による支援のあり方について、お話しいただきました。日本企業の多国籍化の背景や留学生の採用状況、企業の採用目的、採用実績、職場環境などについて現状をまとめられ、その上で長期的なキャリア展望における日本人上司による支援の必要性について述べられました。現状は、部門によって外国人社員の受け入れに対する温度差があったり、組織や社会の前提に関する説明が不十分であり、日本語上級者でも分かりにくい日本人社員の高コンテクストなコミュニケーション、専門性を伸ばし

たいと考える外国人社員に対して様々な部署を経験させるジョブ・ローテーションの実施、実質的な年功序列評価といった組織的な壁など、外国人の受け入れ体制が不十分であるとのこと指摘でした。また、日本人上司は、外国人社員に対して日本的な察しのコミュニケーションを期待し、特にアジア人に対して「日本人化」を求める傾向があること、外国人社員にとって日本人上司の意思表示が読み取りにくくても、日本人上司はコミュニケーションを十分にとっていると思込んでいるというズレがある一方、外国人社員の日本語能力が低く十分に話せない場合、日本人上司はコミュニケーション自体を避ける傾向にあることなどについてもご説明されました。そこで、日本人上司に求められる認知的コンピテンシーを提示され、多文化的状況で働くことができる日本人上司および社員の育成についてご提案されました。



以上、3名のパネリストによる発表後、パネリスト同士での意見交換やフロアからのご質問にお答えいただきました。学会関係者はもちろん、一般公開もされていたため来場者も多く、皆さんの関心の高さがうかがえました。留学生の日本での就職希望は今後も見込まれ、入管法の改正によっても外国人を雇用する企業が増えていく可能性を考えると、今後も外国人社員、日本企業、研究者の連携が求められ、注視していくテーマになるのではないかと改めて感じる本大会のパネル・ディスカッションでした。

報告者：内藤 伊都子（東京福祉大学）

学際シンポジウム

「実践から考える多文化共生の地域づくり—教育・福祉・防災—」

【シンポジスト】伊東 浄江 氏(NPO法人トルシーダ 代表)

【シンポジスト】後藤 美樹 氏(外国人ヘルプライン東海 代表)

【シンポジスト】葛冬 梅 氏(多文化防災ネットワーク愛知・名古屋 代表)

【コーディネーター】近藤 大祐(公益財団法人名古屋国際センター)

学際シンポジウムでは、伊東浄江氏(NPO法人トルシーダ 代表)、後藤美樹氏(外国人ヘルプライン東海 代表) 葛冬梅氏(多文化防災ネットワーク愛知・名古屋 代表)をシンポジストとして招き、教育、福祉、防災を切り口にした多文化共生の地域づくりの実践について紹介していただきました。

第一報告者の伊東氏の報告では、外国人子どもの教育実践の側面から、愛知県在住の外国人の状況と変遷、とりわけ、定住外国人子どもの就学支援事業に焦点を当て説明しました。また、NPO法人トルシーダの成立と沿革および現在取り組んでいる諸活動について紹介されました。その中で、日本語教室、プレスクール、初期指導教室、地域の住民との交流という諸活動の様子が取り上げられました。最後に、愛知県在住の外国につながる子どもの教育の課題についても述べられました。例えば、子どもたちの居場所、言語学習と学業の保障、今後の進路等といった具体的な課題について説明されました。

第二報告者の後藤氏の報告では、外国人の福

祉の側面に立ち、フィリピン移住者センター(Filipino Migrant's Center, 以下FMC)の歴史と活動を具体的に取り上げました。後藤氏の紹介によれば、FMCは、2000年に設立した日本で数少ないフィリピン人のためのフィリピン人による団体です。FMCの特徴の一つは、フィリピン人と日本人ボランティアによって運営されている点です。また、FMCの活動は、主に相談事業、フィリピンにルーツをもつ子どものための学習支援および地域連携事業等から構成されています。とくに相談事業に関して、困っているフィリピン人の話を聞くだけでなく、実際の問題を解決するために、その問題に関連する専門家に繋いだり、他の相談機関の同行や通訳・翻訳したりすることも活動の一部です。最後に、FMCの今後の課題として、相談事業に新たな仕組みの導入およびセカンドライナー(人材)の育成等が述べられました。

第三報告者の葛氏の報告では、防災実践の側面に焦点を当て、多文化防災ネットワーク愛知・名古屋(以下TABOネット)の設立の経緯ならびに活動内容について紹介しました。TABOネットは、2016年12月に設立されました。現在、防災や災害の情報を発信するための多言語防災Webサイトの開発、災害時に使われる「やさしい日本語」の作成および多文化防災イベントやワークショップの開催等に取り組んでいます。葛氏の紹介によれば、これらの活動では、外国人の視点が重要視されています。例えば、言語別SNS利用状況を調査し、外国人が受信しやすい情報の提供方法を採用しています。



また、日本語教師と外国人メンバーと共に、外国人にとっての「やさしい」日本語を用い、災害時に使われる言葉を作成しています。今後、TABOネットでは、政策提言ワーキンググループを作り上げる予定であると説明されました。

3名の報告者の報告が終わった後、オーディエンスから各報告者に質問が出され、活発な議論が行われた後、学際シンポジウムは終了しました。

報告者：叶 尤奇（椋山女学園大学）



▶ 第17回年次大会特集

学会創立20年記念事業セッション

【企画・運営】多文化関係学会学術委員会・学会創立20周年記念事業企画作業部会

多文化関係学会は2022年に創立20周年を迎えます。この機会に、本学会と多文化関係学の将来を切り開くべく、本学会では学会創立20周年記念事業企画作業部会を設立し、2018年度から4年計画での事業を開始しました。

記念事業の基軸となるのが、2018年から2022年までの学会大会で開催予定の連続シンポジウムです。今回のシンポジウムは、いわばキックオフとなるもので、「『スペキュラティヴ』文化研究：『面白すぎる！』文化研究を目指して」と題し、(多)文化(関係)研究の「面白い・楽しい」可能性について、参加者が自由な発想に基づいて思索する場として設定しました。このような目的から、今回のシンポジウムは、通常行われるようなパネリストのみによる報告・議論による形式ではなく、出席者全員による参加型のものとして開催しました。

シンポジウムでは、冒頭で趣旨説明を行った後、話題提供者として鳥塚あゆち先生（青山学

院大学）をお迎えして、南米アンデスでの文化人類学研究とその面白さについて語っていただきました。先生のお話を受けて、続くセッションはワークショップ形式で実施しました。ここでは出席者が少人数のグループに分かれ、それぞれが自身の研究とその面白さを語った上で、それらをかけ合わせて、新しくかつ面白い研究のアイデアを協力して生み出していくことを目指しました。短期的な有用性や予算制約といった条件をあえて意識しないことで、どのグループでも活発な語り合いと興味深いアイデア創出ができました。

2019年度の事業のテーマは「責任」です。ここでは今回のシンポジウムで得られた「面白さ・楽しさ」をベースに、さらに社会的課題とのすり合わせ、本学会が社会に対して何を提供できるか、提供すべきかが焦点となります。このような問題意識を基に、次回年次大会でもシンポジウムを開催予定です。皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

石井奨励賞審査結果

第17回多文化関係学会石井米雄奨励賞審査委員会

【審査結果】

該当なし

審査結果の説明：今回の石井奨励賞には2名より応募があり、学術委員会より選出された3名の審査員が審査を行った。各審査員による抄録審査、口頭発表審査および協議の結果、今回は「石井奨励賞」への該当なしとの結論を得た。審査結果の概要は以下の通りである。

【抄録審査】

主に以下の2点について改善を期待したい。すなわち、(1) 学術報告形式の遵守、(2) 想定読者への適切なプレゼンテーション方法、である。当学会は学際性を謳い、既存の学術領域の範囲に収まらない萌芽的な研究も大いに推奨するものである。しかしながら、学会という場での学術報告としての形式（問題の同定、研究設問・仮説、研究方法、結果および考察、結論、引用文献一覧）に沿った報告であることが求められることを応募者には今一度確認をしてもらいたい。また、応募者の依拠する各研究分野で「当然視」される理論・概念・方法の選択であっても、当学会のような学際性を有する場では、明瞭に提示する必要があるであろう。抄録での字数制限では十全に研究を語りつくせないことは審査員一同、十分承知している。応募者は、その制限のなかで、自身の研究報告のエッセンスを想定読者に伝えるプレゼンテーション力を磨いてもらいたい。

【口頭発表審査】

上記「抄録審査」の(2)、および、スライドを用いたプレゼンテーション・スキルの向上が期待される。(2)については上記を参照されたい。スライドを用いたプレゼンテーションでは、全体の情報量を絞り込み、各スライドへの配分に気を配るとより効果的であろう。とりわけ定性的研究では、調査地や対象者についての詳細な情報提供が必要となることは一定程度不可避ではある。そうであるからこそ、分析や考察における各情報の有意性(relevance)を十分に吟味した上でのスライドへの盛り込みが求められると考える。また、文字フォントの大きさを含めたレイアウトの改善も期待したい。

第18回年次大会

■ 日程:11月 予定

確定次第HPにてお知らせいたします。尚、変更になる場合もあります。

■ 場所:東京未来大学 予定

確定次第HPにてお知らせいたします。尚、変更になる場合もあります。

2018年度多文化関係学会 理事会議事録 抄録

■第1回理事会 議事録

日時:2018年5月26日(土) 11:00~12:30

場所:成城大学7号館 713 教室

出席者(敬称略)11名:松永、中川、湊、田中、松井、宇治谷、原、武田、内藤、趙、山田(順不同)

委任状(敬称略)4名:金本、原、奥西、出口(順不同)

1. 報告事項

(1)2018年度活動計画について(各委員会委員長)

1. 事務局長からの報告

総数318名、一般会員250名、学生会員63名、シニア5名(退会希望1名、)3月末、会費未納の人を除籍した。

2. 地区研究会委員会からの報告

北海道地区:8月4日に捕鯨問題の研究者である細川隆雄氏(愛媛大学名誉教授)により「日本人はどういう理由で鯨塚をたてお祀りしたのか」のテーマで開催予定。

関東地区:5月26日本理事会及び臨時総会終了後、13:30より地区研究会を開催する。

中部・関西:5月12日にワークショップ実施し、25名が参加した。

中国・四国:検討中である。

九州:中国・四国地区研究会との合同により実施を計画している。

3. 第17回大会準備委員会からの報告

年次大会に向けて、研究発表を受け付けている。締め切りは6月10日の予定。学会の参加費の割引は8月10日までの申し込みまで。宿泊、大会会場でのWi-Fiの使用等について大会ウェブサイトにおいて情報提供している。

4. 学会誌編集委員会からの報告

今年度の委員会メンバーの紹介。5月6日に締め切りをし、論文11件、研究ノート3件を受け付けた。19日に第一回目の編集委員会を行い、投稿規定、編集委員の選定、年間計画等の協議を行った。次回は8月9日に査読結果についての会議を行う予定。

5. ニュースレター委員会からの報告

第33号は6月1日をめどに発行予定。第32号に昨年度の議事録が入っていなかったため、次回のニュースレターにお詫びとともに議事録を掲載の予定。

6. 財務委員会からの報告

2017年度の決算書の報告があった。収入は主に学会費であるが、入金 of 報告書に基づいて収入に記載。支出は主に学会誌の管理業務と学会費回収業務への支払い、及び委員会運営経費、会議開催費の支払いである。また監事より理事会出席の理事への交通費補助をもう少し増額してはどうかという意見が寄せられた。

7. 2019年度大会について

2019年度の年次大会は山本志都先生(東海大学)を大会委員長として準備を進めており、順天堂大学で開催することが決定した。2019年度の年次大会の異文化コミュニケーション学会との共催は行わないことになったが、学会の連携の仕方については引き続き検討していく。

8. 選挙管理委員会

7月の第2回理事会において互選をおこなう。規定により1期目の理事は「継続」と定められている。2期目の理事については、残っていただきたい方を理事による互選で決定する。9月の総会にて選挙について周知をし、12月に選挙を実施する予定。

2. 審議事項

1. 2018年度予算案について

収入は会費未納者の人数を考慮し、2017年度と同じ額で設定した。学会誌販売は17年度の実績をもとに15万円とした。支出について、各地区研究会では最大4万円まで支出可能であるため、前回と同様10万円の予算を計上した。学会誌編集委員会運営経費として、英文チェック1万円、『Publication Manual of the American Psychological Association』購入の要望があったため増額した。理事会出張費補助について、監事より現状の20%補助を見直す必要が指摘されたことを受け、70万円を計上した。理事会及び各委員会の出張も含めて支払いを可能としている。選挙管理委員会の選挙に関わる費用は事務代行費から支出する。

2. 20周年記念事業について(予算関連)

2018年度はシンポジウムを年次大会の一環として開催。成果は電子ファイルで発信する予定。シンポジウムに学会員以外の方で最大3名に登壇してもらいたいと考えている。出張費に関しては最大3日間で15万円必要となる見込み。謝礼は大会予算からの拠出をお願いする予定。また現在はネット上の会議システムで打ち合わせを行なっているが、不具合が多いため、東京で集まって事前打ち合わせを行うため2万円を希望している。シンポジウム準備に必要な消耗品もめ、計18万円の予算計上を希望する。→打ち合わせ経費は、委員会運営費からの支出が可能であるため、予定通り17万円で計上することとなった。

3. 理事の旅費補助について

現在、申請額の20%を理事会交通費として補助しているが、監事より、現状の補助額では少ないという指摘があった。20%を50%にすることについて一般会員の理解を得るため、本日の臨時総会で審議し了承を得た上で、総会で報告することとした。2018年度より50%の補助とすることを提案することになった。

4. 編集委員会の会議費について

編集委員会からお願いとして、長時間に渡る会議を行うため、会議費の補助(昼食・夕食など)をしていただきたいとの要望があった。これに関しては、領収書提出の上、学会誌編集委員会運営費用から会議費として支出可能であるとの確認がなされた。

5. 特定課題研究について

本募集で応募がなかったため、追加募集を行う予定。追加募集の内容は前年度と同様とした。

6. 20周年記念事業企画について

学術委員会として若手委員の追加を行うこととなった。

7. 会員の入退会について

新入会員の受付については、最終学歴を必須項目にすることし、また退会届の提出については3月31日までとし、ホームページに記載することとなった。問い合わせ先一覧を作成し、会員に周知することとした。また年次大会の駆け込み入会の対応として、注意喚起をホームページ上で行うことになった。

■第2回理事会 議事録

日時:2018年7月28日(土) 11:00~13:00

場所:九州大学西新プラザ 2 階

出席者(敬称略)10名:松永、田中、山田、出口、金本、笠原、宇治谷、趙、中川、山本(オブザーバー)(順不同)

委任状(敬称略)6名:奥西、松井、内藤、原、湊、武田(順不同)

1. 報告事項

(1) 事務局長からの報告

- ・ 現時点での、会員数は正会員253名、学生会員数67名、シニア会員5名、合計325名。
- ・ 学協会サポートセンターとの契約終了に伴い、次期の委託先を探している。

(2) 地区研究会委員会からの報告

- ・ 関東地区研究会 5月26日に関東地区研究会では手話通訳士のワークショップが開催された。当日は NHK の取材も入り、ワークショップの様子が 一部、7月7日(土)の「ろうを生きる難聴を生きる」で放送された。
- ・ 本日(7月28日)13時半より九州・中国四国地区共同広域研究会が開催 され、大学院生の発表が予定されている。

(3) 第 17 回大会準備委員会からの報告

- ・ 司会者は現在調節中、参加者は引き続き募集している。研究発表は22件予定されている。現在は11名体制で抄録のチェックを行っている。今後はMLで参加締切や JTBを通した宿泊予約の締切の案内をする予定。

(4) 学会誌編集委員会からの報告

- ・ 8月9日に第2回の編集委員会が開催される。

(5) 学術委員会からの報告

新委員1名の加入と募集について

- ・ 6月から河野秀樹会員(目白大学)が新委員として加入。
- ・ 新規委員を募集中。

特定課題研究募集について

- ・ 7月31日まで募集継続中。応募があり次第、学術委員会で審査のうえ、結果を理事会に送付予定。

学会創立20周年事業について

- ・ 2018年度年次大会2日目(9月23日)9:30-11:50に初年度シンポジウムを開催予定。
- ・ 青山学院大学鳥塚あゆら助教を話題提供者として、前半は講演、後半は学術委員も交え、参加者各自による自身の研究の「熱い語り」を中心としたワークショップ形式で進行する予定(詳細については変更の可能性あり。)

石井奨励賞について

- ・ 年次大会で石井奨励賞への応募が3件あり、選考を行う。
- ・ 選考は例年通り、1次選考(抄録)、2次選考(報告)の2段階方式で行い、受賞者1~2名を決定予定。
- ・ 審査員は今年度より、審査員は学術委員会から1名、現役理事および理事経験者2名の予定。

2. 審議事項

(1) 年次大会での口頭発表司会依頼及び一般公開の範囲について

- 司会者を調整中で、年次大会委員長より理事及び会員への協力要請がなされ、今後依頼メールを送ることが審議され、承認された。
- 研究発表、ポスターセッションは会員のみ限定し、基調講演、パネル・ディスカッション、学際シンポジウムは一般公開にすることが審議され、承認された。

(2) 学会誌投稿規定の改定に関わる事項について

- 執筆要綱と投稿規定の英語版の改訂が提案され、承認された。大学院生が投稿する際に提出するチェックリストのフォーマットが提案され、承認された。(資料あり)

(3) 次期理事会体制について

- 会則に則り、事務局、財務、関東地区研究会、中部・関西地区研究会、広報・Web管理委員会の継続が審議され、理事会による互選により、5名の理事が選出された。なお、1期目の理事のうち、継続が困難な理事を除いた結果、NL委員会委員長を被選挙者として理事会より推薦する。

(4) 2018年度理事選挙の実施について

- 年次大会時の臨時総会で、理事選挙が告知され、自薦・他薦を募る予定であることが報告された。
- 今後のスケジュール(9月に選挙の告知、募集、11月末に推薦、12月中に投票、締切)が審議され、承認された。しかし、この日程では選挙の告知から実際の選挙までの時間が空きすぎることから、理事会後、選挙管理委員長より、選挙日程の変更が提案され、審議のうえ、以下の日程が了承された。

[選挙日程(予定)]

9月21日有権者・被選挙人確定のための会費納入締め切り

9月30日有権者・被選挙人確定

9月23日～10月19日選挙案内、自薦・他薦の募集、有権者・被選挙人名簿の作成

10月29日～11月4日 被選挙人名簿、投票用紙等の選挙関係書類の発送

11月30日投票締め切り(当日消印可)

12月初旬開票

(5) その他

オンライン理事会の開催可能性について

- 時期の変更や「ズーム」などのシステムを使って、できるだけ多くの理事が参加できる方法が検討された。

*2018年度第3回理事会および総会(年次大会期間中)

- 9月23日(日)8時から開催予定

以上。

■第3回理事会 議事録

日時:2018年9月23日(日)

場所: 椋山女学園大学 星ヶ丘キャンパス 国際コミュニケーション学部棟421教室

出席者(敬称略)16名:松永、中川、湊、田中、金本、原、笠原、松井、武田、宇治谷、山田、出口、内藤、趙、小松(オブザーバー)、松田(オブザーバー)(順不同)

欠席者(敬称略)1名:奥西

I. 報告事項

1. 事務局からの報告

9月19日現在の会員数(大会希望者を除く)は、正会員が317名、学生会員が68名、シニア会員が4名

2. 各種委員会からの報告

●各地区研究会委員会からの報告

・北海道・東北地区研究会

8月4日(土)に、愛媛大学名誉教授の細川隆雄先生による「日本人はどういう理由で鯨塚をたてお祀りしたのか」が開催され、35名の参加があった。

・関東地区研究会

5月26日(土)に成城大学にて、菊川れん氏の講演が開催された。
NHKの取材が入り、7月7日(土)に当日の様子の一部が放送された。

・中部・関西地区研究会

3月17日(土)に、ヤコブ・E・マルシャレンコ氏による発表「法廷通訳人からみた通訳言語としての英語をめぐる課題に関する一考察」が、名古屋外国語大学にて開催された。
5月12(土)にニューメキシコ大学名誉教授のジョン・コンドン先生によるワークショップが、名古屋外国語大学にて開催された。

・中国・四国地区および九州地区広域研究会

7月28日(土)に、九州大学西新プラザにて研究会が開催され、大学院生2名の発表があった。15名の参加者があり、活発な議論がなされた。

・中国・四国地区研究会

今後、外国人児童生徒等とかかわる人を対象とした異文化間カウンセリングに関する講演とワークショップを年度末に開催することを企画中。

3. 第17回大会準備委員会からの報告(大会委員長)

大会委員長より「この度はありがとうございました。本日は3時頃の終了となりますが、今日一日宜しくお願ひします」との挨拶があった。

4. 学会誌投稿規定に関する次期理事会への申し送り事項

投稿規定における日本語と英語の齟齬の修正に関して執行部に依頼があったが、過去の議事録等の資料に記載はなく、執行部では対応が難しい。本件は、時期の理事会へ申し送り事項として伝えることにする。

5. 2019年度大会について

大会委員長は東海大学の山本志都先生。開催校は未定だが、東京未来大学の予定。次期は11月を予定。

6. その他

- 武田先生

2015年の英語ラウンドテーブルの内容をもとに教科書*Steps to Academic Presentations*を執筆した。学会名も入れ、執筆者は武田礼子先生、Mira Simic-Yamashita先生、八島智子先生。1月11日発行予定。授業等で採用する時は、ご一報願いたい、との依頼があった。

- 学会誌第15号の進捗状況(学会誌編集委員長)

投稿本数は14本で、査読、再査読を終え、論文4本、ノート1本の採択が決まった。採択率は35%。

- ニュースレター委員会より原稿執筆依頼(NL委員会委員長)

「第34号(大会特集号)案」をご確認頂き、原稿を1月6日までに提出する。地区研究会は6月開催以降分を執筆する。2月発行なので、開催予定のものも掲載可(学術委員会より)石井米雄奨励賞については、審査委員が原稿を執筆し、学術委員長に提出する。

*大準備委員長より、次回のニュースレターでの年次大会のシンポジウム等企画に対する執筆依頼があった。

- 学術委員会(学術委員会委員長)

学術委員の新委員として、藤美帆先生(広島修道大学)の加入が承認された。

特定課題研究の募集は今年度なかった。2019年度の募集に際して、制度の再検討が必要(審議事項)。

学会創立20周年事業のシンポジウムが本日開催される。

- 財務委員会

前回の臨時総会で承認された内容を本日報告する。

- 選挙管理委員会(選挙管理委員会委員長)

今回理事選挙の対象となる役職は、学会誌編集委員会副委員長、学術委員長、北海道・東北地区研究会委員長、中国・四国地区研究会委員長、九州地区研究会委員長、監事1名。自選・他薦による応募締め切りは、10月19日。

*今年度をもって退任する理事及び監事:松永、中川、原、奥西、山田、笠原、趙、小松

*留任:田中、松井、出口、武田、宇治谷

理事会推薦により、次回理事選挙にて、信任投票対象となる理事・監事、湊、内藤、松田、金本

- 学会誌の校閲作業について(学会誌編集委員長)

一部の大学院生や留学生の投稿論文の校閲の作業が煩雑になってきている。技術的な修正については、現在委員会で外注を検討中である。

II. 審議事項

1. 事務委託業者変更にとまなう引き継ぎ業務について

学協会サポートセンター廃業につき、3社から見積もりを取った。

→「あゆみコーポレーション」か「アクセライト」の2社をさらに検討することにする。

2. 次期理事会の体制について

自薦、他薦について確認がなされた。

3. 特別課題研究の今後のあり方について

研究補助額の少なさ、メリット等について指摘がなされてきており、2019年度のあり方について抜本的な見直しが必要。→「2019年度も制度を継続し、補助額を増加する」方向で調整するが、不可能な場合「2019年度も制度を継続するが、補助の増加が行わず、他のインセンティブ提供や告知の強化により応募を促す」ことにする。11月の募集に間に合うよう、学術委員会で検討をし、制度改正を進めていく(*メール審議にて決定する)。

* (財務委員会より)2019年度については予算の増額が可能。

4. 年次大会の抄録のコピー販売の問い合わせについて(事務局)

→暫定的な処置として、以下のように決まった。今年度の抄録希望者は冊子本体を購入してもらおう。郵送料込みで3000円で販売する→昨年度の抄録については、発表1ページにつき100円で販売する
→ それ以前の発表はPDFで差し上げる

<次回> 2018年度第4回理事会
2019年3月開催予定
場所未定

地区研究会報告

■北海道・東北地区研究会報告

日時：2018年8月4日（土）

場所：藤女子大学

講演者：細川 隆雄 氏（愛媛大学）

8月4日に北海道・東北地区研究会が開催され、今年は、愛媛大学名誉教授でいらっしゃる細川隆雄先生に「日本人はどういう理由で鯨塚を建てお祭りしたのか〜鯨の記憶を追って愛媛県遊子から世界へ、鯨塚巡礼の旅」というテーマで話題提供をいただきました。あわせて34名の参加者があり、多くは会場となった藤女子大学の学生でしたが、そのうち7名は地元の新聞による紹介記事を読んだという一般の参加者でした。以下は、北星学園大学教授の長谷川典子先生による講演報告です。

あまり馴染みのない…というより、これまで全くその存在を知らなかった「鯨塚」であるが、今回の講演から、日本の漁師の人々と鯨の関係性はある意味実に深く、日本での「捕鯨」は、反捕鯨団体の人々が理解しているようなドライな資源利用の行為ではなく、その背景には様々な濃密なストーリーが存在していることが理解できた。講演の中で細川氏が繰り返し主張されたのは、日本では、鯨は信仰、祭祀、芸能の対象であり、鯨を中心とした、豊かな「鯨文化」が代々培われてきたということであった。

当日は、長年にわたる鯨塚フィールドワークの結果をもとにした奥の深い解説とその背景文化についての熱のこもった講演がなされたが、ここでは簡単に、講演内容の紹介をさせていただくこととする。まず「鯨塚とは何か」であるが、一言でいえば、鯨を供養するために建てられた「墓」とであるという。多くは仏教式墓石の形をとっているが、中には鯨の下あごや骨を供えたものなどそれが作られた地方によっても多少のバラエティがあるそうだ。最古のものは縄文時代にさかのぼり、最も盛んに作られたのは江戸・明治期であるが、最新のものは2年前に建立されるなど、鯨塚の研究からは、いにしへの時代より現代に至るまで日本では鯨が感謝、



畏敬の対象とされてきたことが明らかになったという。また、鯨塚建立の際には僧侶を呼ぶなど人間と同様の弔いの儀礼が行われることが多く、鯨塚の建立とは非常にお金のかかる非経済的な行いであるようだ。

一般的に「鯨塚」と聞くと捕獲した鯨を祭ると考える人が多いのではないかと思うが、実は鯨塚は「非捕鯨地域」に建てられたものの方が圧倒的に多いという。つまり、捕鯨文化に属する人々にとって鯨は単に富をもたらす狩猟の対象であるため多くの場合「塚」を立てて祭る必要も感じない一方、非捕鯨文化に属する人々にとって、鯨は富をもたらす宝ではあったが、同時に「海の神の使い」のような貴い存在と捉えられていたため、崇りを恐れた人々は積極的に捕鯨を行ってこなかったという。ただ、偶然鯨が迷い込んできた際には、感謝しつつその富を享受したのちに、畏敬の念を抱きつつ塚を建立し、災いが村人に降りかからないよう祈りをささげたということのようである。

このように自然を畏怖の対象としつつ鯨塚を建立してきたのは北海道のアイヌの人々も同様であるようだが、北海道では和人によるアイヌ



文化はく奪の流れの中で、鯨塚建立やそれにまつわる儀式も消失してしまったため、現存している鯨塚は本州に比べて圧倒的に少ないとの報告もされた。北海道に暮らす中で、アイヌ文化を奪った和人の暴挙については耳にすることも多いが、ここでもまた文化はく奪の話を知ることになり能天気な和人の一人であった筆者は耳の痛い思いであった。

講演の最後には、日本として反捕鯨の流れや運動についてどのように向き合うべきかについての話題になり、フロアと熱い議論が交わされた。The Coveなど反捕鯨の強烈なメッセージを含んだ映画やドキュメンタリーの広がりとともにどちらかと言えば劣勢に立たされてきた日本であるが、日本は単なる「捕鯨国」ではなく、鯨を大切に崇め、祀ってきた「鯨文化」の国であるという細川氏の強い主張がより多くの人に理解される日が1日も早く来ることを祈りつつ会場を後にした。

報告者：長谷川 典子（北星学園大学）



■ 関西・中部地区研究会報告

日時：2018年5月12日（土）

場所：名古屋外国語大学7号館3階（738教室）

講演者：ジョン・コンドン氏（ニューメキシコ大学）

A Report on John (Jack) Condon's Workshop, "It Goes Without Saying"

Kevin Ottoson, EdD (Nanzan University)

The Japan Society for Multicultural Relations and SIETAR Japan Chubu organized a workshop by Dr. John Condon to provide a new look at Edward T. Hall's work. Edward T. Hall, an anthropologist, who coined the term *intercultural communication*, launched a field where his insights are still radical even today. John Condon's workshop was based on his latest book, *It Goes Without Saying*. The following paper provide a report of Dr. John Condon's workshop.

Outline of the Workshop

- Notable contributions;
- the scope of Hall's life, research, and what shaped his ideas;
- Edward's first assignment;
- video of Edward Hall exploring cultural perceptions of time and communication.

Notable Contributions

Dr. John Condon began the workshop by giving a general overview of Edward T. Hall's life, research, and what shaped his ideas. While many people might only know his name for an answer on a test, Edward T. Hall is credited with coining the term *intercultural communication*. Hall, an anthropologist, focused on the "inter" part of intercultural communication, thereby placing importance on oneself and one's relationship with others. Hall's first book, *The Silent Language*, was the most influential, and it has sold about 5 million copies worldwide. When this book was published in 1959, it caused some controversy among many American anthropologists, as it was written for the general public. Hall was more interested in writing for everyone. Dr. Condon shared the story of how Deborah Tannen, the author of *You Just Don't Understand: Men and Women in Conversation*, was heavily influenced by *The Silent Language*. Tannen's parents had a copy of *The Silent Language* that she picked up at an early age. This gave her the courage to write for the general public, not just for linguists. Dr. Condon mentioned how it is not uncommon for academics to receive criticism when they gain popularity with the broader public.

Another term that Edward Hall has been credited with coining is *proxemics*. This is the study of meaningful interpersonal space and how rooms are arranged. He was interested in how this arrangement of space can express and regulate communication.

Hall hoped that intercultural work could follow a model like linguistics. That hope has largely fallen apart. Hall was also interested in how time is organized. In *The Silent Language*, Edward introduced both monochronic time and polychronic time. The term *polychronic* refers to the ability to handle multiple events simultaneously. Whereas, monochromic time refers to the ability to attend to multiple events sequentially. In his

book, he talked about m time and p time. These terms made it easier to remember for the general public while at the same time avoiding an air of pretentiousness.

Additionally, context was crucial for Hall. He often said that nothing means anything without context. Thus, a model of higher context and lower context was shaped. Dr. Condon mentioned how these distinctions matter. Failure to understand high context and low context has led to severe consequences. In sum, Edward T. Hall provided terminology (e.g., proxemics, high-context cultures, low-context-cultures, monochronic time, polychronic time) that has gained widespread usage.

Dr. Condon's First Meeting with Edward T. Hall

Dr. Condon met Edward Hall for the first time in the early 1960s after John received his doctorate. Condon had just recently joined the faculty at Northwestern. At the time, Edward T. Hall was at Illinois Institute of Technology (IIT) where he was the resident anthropologist at an institution for engineers. At the time, Dr. Condon wanted to use *The Silent Language* in a class he was teaching. So, Dr. Condon wrote Edward Hall a letter about using the book. Hall responded by inviting Dr. Condon to his house in a nice neighborhood of Chicago. Condon arrived at his door and asked if he was Professor Hall, and he said, "Call me Ned." That was his nickname, so Dr. Condon proceeded to call him Ned during the workshop, as it is easier than Edward T. Hall.

Edward T. Hall had an old brownstone house from 1890. It had very dark halls with paintings on the walls. They looked like modern art. It was like an art gallery. Each painting had a light strategically positioned to illuminate the paintings. Edward invited Condon back to his study. There were books and papers all over. Condon ended up asking him what he was studying now. Edward replied, "Space." Condon hesitantly replied, "Okay" Edward began to talk about how he perceived space. For Hall, perception was fundamental. He talked about the physiology of the body and the mechanism of the eye and how we sense who we are in relation to others.

Two things struck Dr. Condon that day. One was about the hall with paintings. Hall was not an artist. Yet, he literally illuminated what was important for one to look at in each of the paintings. Edward Hall did not want to stay within on discipline. He never said, "As an anthropologist, I'm studying such and such. However, that was what got him in trouble when Hall wrote *The Silent Language* because he did not do what anthropologists should do. He took the essence of who knows about this, who has something to contribute, and what and that is what he tried to bring together.

John Condon shared a quote from Austrian physicist Erwin Schrodinger, as it expressed what was unique about Hall's work, "The task is not so much to see what nobody else has seen, but to think what nobody else has yet about that which everybody has seen." For Condon, Hall's contribution was thinking about or seeing in a new way something that everyone has seen.

Deborah Tannen provided an example to illustrate this with men and women. Men often do not look at their wives. Thus, women think that men are not listening to them. However, women are often surprised that the man tells her what she said. Tannen described how, at a young age, boys sit side by side and talk to each other like they are in a car and girls engage face to face and they tell each other very intimate details. According to Tannen, one would think people living together would have figured that out. However, it is thinking in a way that no one else had thought about rather than what everyone sees. This is Hall's contribution and the focus of his work.

The Shaping of Edward T. Hall's Ideas

Academic and Early Background

Hall had three degrees in anthropology; he received an undergraduate degree at the University of Denver, his master's at the University of Arizona, and a PhD at Columbia. Edward T. Hall was born in 1914 at the time of the first World War. He was born in a well-off suburb of St. Louis Missouri, Webster Groves. At the time, St. Louis was the fourth largest city in the United States. It had the Olympics and the World's Fair. It was probably the most happening place west of the Mississippi in the United States. Hall's mother was interested in art, and she wanted him to go to the newly formed state of New Mexico. Dr. Condon could not think of anything more different from St. Louis than of Santa Fe, New Mexico, the capital. Santa Fe was considerably more rural than St. Louis at that time.

Growing Up in a Diverse Environment

In Sante Fe, Hall was an outsider. He grew up in a place where most of his neighbors' first language was not English. They spoke Spanish, Navajo, and some of the Pueblo Indian languages. Edward was very much in the minority. It was kind of ironic because when he became an anthropologist at Columbia, the anthropologists who had started the department had come from Germany to study the languages primarily where Edward Hall had grown up.

Separation

Hall's parents separated when he was very young and throughout his life used to tell people, "I'm an orphan." Hall was not an orphan, just without a father but this was an issue for him his whole life. Dr. Condon described how sometimes when one grows up in a family where there are challenges, one learns to pay attention to specific nonverbal cues and what is going in the environment. These challenges could be what contributed to the type of sensitivity Hall had. It is impressive that Hall was able to take those difficulties and turn them into strengths.

Los Alamos Ranch School

After he finished high school, Hall's father sent him for one year to a place that was quite well known, the Los Alamos Ranch School. This was one of many ranch schools in the West that existed in the early half of the 20th century. These ranch schools attracted the wealthy and elite from the East Coast as places to send their sons to teach them to be healthy, strong, and independent. The ranch school movement ended up producing some impressive graduates. There, the students led a very disciplined life. Everyone dressed like Boy Scouts despite the cold temperatures in the winter. Furthermore, every student was given a horse to take care of. It was from here that Hall developed a love for horses. Much of Hall's early research was done on horseback, as there were no roads for cars where he went to conduct his research. The Los Alamos Ranch School eventually closed in the early 1940s. The school was purchased by the U.S. Army's Manhattan Engineering District as a place to develop the atomic bomb. Robert Oppenheimer, the Manhattan Project scientific director, remembered seeing the school while hiking and thought it might be an excellent place to develop a top-secret weapon in a very remote and secure location. Today, it is a national historic landmark.

World War II

The second World War came, and Hall finished his PhD. Hall had a medical condition and was not required to go into the army, but he wanted to join for various reasons. One reason was that he wanted to learn more about bureaucracy. Earlier in the 1930s, during the Great Depression, the government was trying to create jobs for people. Interestingly, the U.S. government asked the Hopi and Navajo tribes to build dams in the West. The Hopi and Navajo had been fighting each other for centuries. They had very different backgrounds. So, the government put them together and sent Hall, 23, to manage the project and get the Hopi and Navajo people to work together to build the dam. The biggest problem, according to Hall, was not so much the intertribal issues, but the bureaucracy in Washington DC that sent incomprehensible messages. As a result, Hall wanted to learn more about that.

Hall wanted to know how one teaches the millions of people going into the military in a very short time. How does one teach them to be trained in matters of life and death? How does one teach people with a lot of education and people with very little education from different parts of the country? How does one teach people? Edward Hall was very curious about this, and it became essential to his work.

Political Views During the War

Hall was very progressive. During World War II, he asked to be a part of the African-American regiment. The U.S. Army was segregated at that time. Hall fought for these concerns. Intercultural communication came out of his basic perceptions of the world.

Post-World War II

After the war, Edward Hall was asked to join the Foreign Service Institute. During the postwar period, many former European colonies were gaining their independence, and new nations were forming. There was more political activity, the United Nations was established, along with new ambassadors and consulates. There were a lot of people to train. So, the Foreign Service Institute asked Hall to determine how to teach culture. For Hall, it was always intercultural education. It was not only learning about people in this country or this culture, which was the usual route. Rather, it was to be aware of one's own culture, behavior, and reactions. After 10 years, Hall was excused from his work with the Foreign Service. Subsequently, the Foreign Service Institute decided not to employ any more anthropologists. They returned to the usual route of teaching and training people the information about the country and its people.

Writing The Silent Language

Dr. John Condon learned about how Edward Hall began to write *The Silent Language* after leaving the Foreign Service Institute. About 20 years ago, Dr. Condon was partly dealing with the issue of depression, not terribly serious, but serious enough where he was not functioning well. Dr. Condon mentioned how his lack of sleep and the poor class evaluations made him more depressed. So, he mentioned this to Hall. Edward Hall said that he had the same problem after he left the Foreign Service. Hall mentioned how he got up an hour earlier every day and wrote *The Silent Language*. Dr. Condon did not recommend that process as a way of dealing with depression, but sometimes out of adversity, something good can evolve. This was the case with Hall.

Back into Academia

Hall went back into academics. He moved from IIT to Northwestern. Hall was invited by the International Christian University to a conference in Japan. There, his interests in art and aesthetics were part of his attraction to Japan. He distrusted words, which Dr. Condon thought resonated with a particular philosophy in Japan. He wrote most of his books after that. In *The Hidden Dimension*, the book he was working on when Dr. Condon first met Hall, he wrote on space. Much later, Hall wrote *The Dance of Life*. This book was about time; Hall wrote how we learn about time and space, the cultural ways of looking at both, and the notion of culture. It was a very productive time for Hall.

Later Years

In the 1990s, he suffered the first of a series of strokes. A week after they attended a conference together, he had the first of these strokes. Hall was hospitalized, and he seemed fine. Edward Hall said he felt fine but then over the next few years or so, he suffered stroke after stroke. In his last years, he could not speak. It was a little ironic; it was the silent language in a new sense. Hall could understand and recognize people. He still enjoyed a glass of wine now and then.

On July 19, 2009, in memory of the 50th anniversary of the publication of *The Silent Language*, Dr. John Condon offered a Saturday workshop about Hall's work. Dr. Condon asked his wife if she thought his workshop members could call from Portland. During the call, she could hold the telephone up to him and whoever was at the workshop could wish him well and express his or her appreciation. So, Hall's wife arranged the telephone call. First, Dr. Condon said a few things and passed the telephone to the next person. Each person expressed his or her gratitude for his work. It was not too long after his 94th birthday, so they all wished him a belated happy birthday. Halfway through the call, the group sang, "Happy Birthday" and then someone thought he dropped the phone. Someone said, "Ned, are you still there?" He said, "Yes." Dr. Condon had not heard Hall speak in three years. Then the group passed the telephone around and thanked him once more. The next morning, Dr. Condon learned that Edward T. Hall had died during the night. The last voices he heard were those of thanks. Dr. Condon said that sometimes you do things at the right time. Sometimes, you miss your chance, and later you regret it. He just happened to luck out at that time.

New Trends

Edward Hall saw structural linguistics as a possible model for teaching what he was interested in, what he believed was important, or what was he was asked to try to do. Is it possible to teach a foreign language in the same way as teaching culture? Where does one start? In linguistics, there are phonemes, morphology, and then grammar, and then one builds it up. However, Hall was curious if it was possible to build the teaching of culture in the same way. That was his goal. Edward Hall had many questions: What does one do? What does one start with? Where does one start? How does one start? *The Silent Language* gives one an idea of where he was going. Around this time or shortly thereafter, Noam Chomsky appeared on the scene. Chomsky believed everything is connected. Thus, the things at the surface (e.g., how we talk, differences in language) are really not that important. Forget about that stuff and go down to the theory. Hall's work seemed suddenly old-fashioned.

Neuroscience

Edward Hall became more interested in his later years in our brains as guiding influencing perception and expression. That was ahead of whatever the neuroscience was at that time at Yale University. The triune theory of the brain became quite popular at that time.

Dr. Condon admitted that he is probably not the first to say that but that he was shocked that for mammals most of what they need to survive they are born with or have some sort of imprint. The rest of us cannot survive with what we were born with. Humans need to learn from others. We cannot survive without a language or learning things that are outside of us. Perhaps the word culture will disappear, but basically, this is where we can see ourselves now. This is a stage in our evolution.

Later on in the workshop, Dr. Condon spoke about how Hall's idea of high-context culture and low context culture are analogous to the left and right brain nature of the brain. The right brain is more sensing while the left is more bureaucratic. Dr. Condon provided the example of a traditional marriage oath vs. a prenuptial agreement to illustrate the differences in high and low context. A marriage oath can be something more vague and feeling in nature, where a prenuptial agreement is a contract that stipulates what specific measures will happen. Neuroscience tries to see what happens inside of the brain. This is clear evidence that culture affects the brain's response. It is a world that Hall was thinking about how it is going to change how we teach, train, and do research. Dr. Condon believes this is a fascinating, challenging, and new way of looking at things.

Dr. Condon also provided an interesting example by inviting the audience to take a look at the common Japanese ear cleaning instrument, a *mimikaki*. He asked the audience to think about what memories they have of a *mimikaki*. What time of day is it? Where are you? What kind of light is there? What are you touching? There are various senses happening while we try to recall our memories and cultural meanings in this simple instrument. However, now we put it in a museum in a case with a brief description of the instrument. Dr. Condon explained why this is difficult to teach culture and how we acquire culture much differently than a second language. It is something you learn growing up, rather than left-brain information to describe an object.

Marshall McLuhan

Hall was a friend with all kinds of people. Marshall McLuhan wrote about media in *Understanding the Media: The Extensions of Man*. Extensions of people, like clothing or wheels, are things that we are not born with but are a part of who we are and how we function. McLuhan argued about who used the word extension first, but this notion of things outside of us as shaping our culture was something that came to concern Hall. Hall thought that maybe the speed of technology is going faster than human beings have learned to adapt to it. He thought about what extent or at what point would we have at our disposal or our ability to use that which we are fully capable of seeing what might happen. These are things that people generally do not think about

Hall's First Assignment

Dr. Condon illustrated Hofstede, Hofstede, and Minkoff's (2010) three levels of the uniqueness of human mental programming (see Figure 1). The top of the triangle represents the individual's personality. Here is what makes one different from others. Then, below the individual, represents the group. Here is the culture that one shares with a group of people (e.g., nations, males, females, family, religious groups). Then, the bottom of the triangle represents human nature. Here are things that you share with all humans. Dr. Condon described how Hall spoke of these ideas.

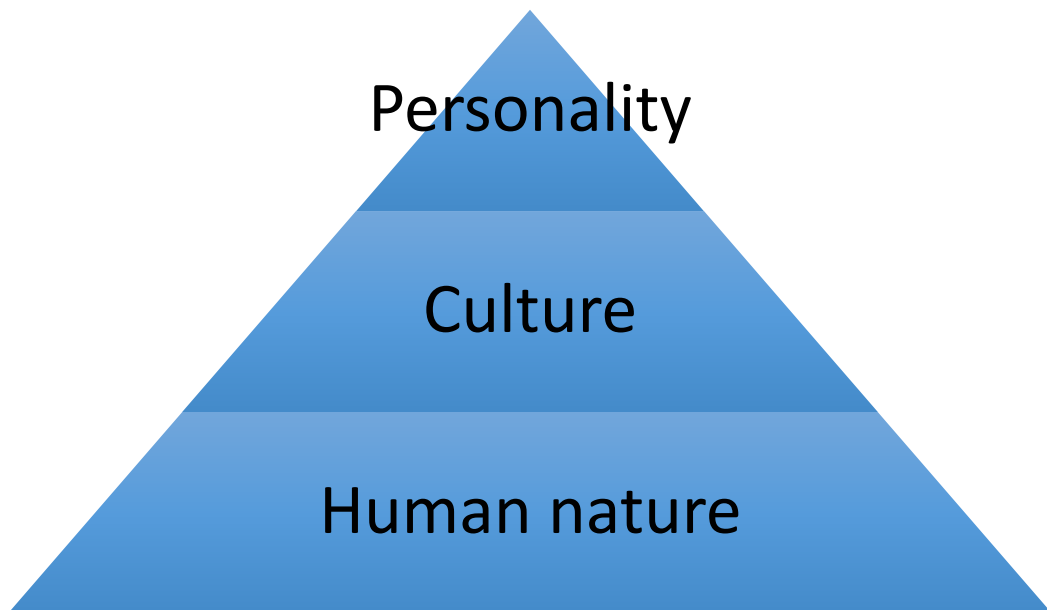


Figure 1. Hofstede's three levels of human mental programming (adapted from Hofstede, Hofstede, and Minkoff, 2010).

Dr. Condon invited us to take part in an activity to illustrate the bottom space where all humans share similar behaviors. We showed our partners the facial expression for fear and then disgust. With fear, all participants noticed that mouths were open while pupils were dilated. The opening of the mouth can be attributed to the practice of gasping for breath. Conversely, disgust involved the participants making the mouths smaller, and therefore, rejecting what you do not like. No matter where you grew up in the world, no matter what language you speak, Hall believed this was a part of the process of evolution that brought us from animal behavior.

Hall used to say to his students that perception is what you intend to do about something. Intent is a somewhat tricky word, but perhaps what he meant was that even before we think we know how we are going to react when we take in information, our body is already prepared to respond in a certain way. That also comes from the outside awareness influence on our behaviors. His first assignment for his students at Northwestern was to ask each person to do a kind of inventory of his or her own preferred senses. He asked to us think about how we take the conventional sensors (e.g., seeing, smelling, hearing, tasting, touching). Hall asked his students to think about something they liked to do or something important they liked. Then Hall asked his students to consider how they approached it. Some people might approach something visually, tactilely, or kinetically. Dr. Condon asked participants in the workshop to take a break and give themselves five minutes alone and consider how they approached something they enjoyed doing. Many would say visually, but when one accesses a memory, how does it appear? Is it a series of pictures or moving pictures? Is it in color? Black and white? After five minutes, the participants got together to share their ideas in a small group. Dr. Condon's hope was that this might illustrate a diversity of senses within our group. Often, diversity in background is emphasized or valued, but we also need to consider the variety of senses that exist among us.

After the break, Dr. Condon reminded us that our ways of taking information could differ widely. We cannot assume that everyone perceives the same thing in the same way. Comments from the group members illustrated the diversity in ways they use their senses to approach things they enjoy.

Video of Edward T. Hall

Finally, Dr. Condon provided a short video of Hall. In the video, he is asking a sculptor from the Pueblo Indian tribe about some ruins, cave dwellings, and stone carvings. In the video, she talked about the importance of a circle in their community. Then Hall asked a very typical question for him, “How did you learn this?” She then went into her experience growing up with both Pueblo and German culture.

Conclusion

After the video, Dr. Condon opened up the floor for questions and comments. He was extremely generous with his time. Dr. Condon answered questions on his PhD, Hall’s experiences with the American Anthropological Association, Hall’s regret that linguistics broke off from the field of anthropology. We were fortunate to have Dr. Condon share his experiences with Edward Hall and to educate us on how Hall’s ideas are still very relevant today.

References

Hofstede, G., Hofstede, G. J., & Minkov, M. (2010). *Cultures and organizations: Software of the mind* (Rev. 3rd ed.). New York, NY: McGraw-Hill.

■中国・四国地区及び九州地区合同の広域研究会報告

日時：2018年7月28日（土）13:30～16:30

場所：九州大学西新プラザ2階 多目的室

本研究会は、中国・四国地区及び九州地区の合同による初めての研究会であり、その目的は、若手研究者間での討論や経験豊富な学会員によるアドバイスを通じて、年次大会での発表や学会誌投稿への足がかりとしていただく機会を提供することであった。審査の結果、博士後期課程に在籍する2名の大学院生による発表が行われた。

【発表1】

話題提供者：ジュニ プトラ氏（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程1年）

タイトル：「日本事情教育における異文化コミュニケーション能力の育成方法に関する基礎研究 - インドネシア日本語教育を事例として -」

近年日本語学習者数が世界で第2位になったインドネシアにおける日本語教育は、それまでの東アジア漢字圏の国々とは異なり、日本語教育に関するいずれの分野においても先行研究の蓄積が浅く、早急に研究の活性化が求められる分野と言える。

話題提供者は、日本事情教育に着目し、日本語母語話者と直接的なコミュニケーションの機会が少ないインドネシアの日本語学習環境では、どのような日本文化・日本事情授業を行うべきかを明らかにしようとし、今回は、インドネシアの大学レベルで行われている日本事情教育に考察を加えることで、その問題点や課題を浮き

彫りにしようとしてみた。その考察の結果、インドネシアの大学レベルの日本事情教育は、インドネシア人日本語教師が担当することが多く、学習内容や指導法は各教師に任されており、統一されたコースデザインが存在するわけではなかった。また、学習内容が知識に偏っており、教師主体の授業になりやすく、実践的な異文化コミュニケーション能力を育成することができていないことがわかった。

話題提供者の熱い思いが伝わってきたので、その思いを研究として昇華できるように、フロアからも研究方法と研究内容の双方の面から、多くの質疑とアドバイスが行われた。

【発表2】

話題提供者：郭睿麒(えいき)氏（山口大学大学院東アジア研究科博士後期課程1年）

タイトル：「櫛という「もの」の一考察 - 中日両国におけるアンケート調査を中心として -」

20世紀の前半から中期までの人類学は、フィールド調査で収集した個別具体的な「もの」から、抽象的なシステムや「もの」と文化の関係性などに関心をシフトさせてきたが、「もの」自体に対しての関心は少なかった。しかし、20世紀末以降、考古学や生態人類学等の多くの分野を横断する形で「もの」の物質文化研究が改めて盛んになってくると、生態人類学者は研究の最先端に立ち、自然と社会という二元論モデルを考え直した。

話題提供者は、ミャオ族との出会いから、報告者の生まれ育った文脈とは異なるミャオ族の櫛に興味を持った。そこで、櫛という「もの」の違いを探求するために、中日という異なる両国で櫛についてのアンケート調査を行うことにした。今回の報告では、山口大学と中国済寧技師学院の総419人のアンケート調査対象のデータを分析し、統計的なデータをまとめた。考察の結果、櫛は「単純なもの以上のもの」として現

れたり、人々の思いや感情を引き出す「行為」をしたりしていることがわかった。

フロアからは、現代の髪型によっては、そもそも櫛を使わない可能性が指摘されたり、櫛に対する個々人の思いが語られたりするなど、大いに盛り上がりを見せた。

全体としては、変則的な動きを見せる台風の接近が連日伝えられる中、開催地区の会員や参加者だけでなく、研究会の前に開催されていた理事会からの流れで参加された会員のおかげでもあり、15名ほどの参加者間で活発な議論を展開することができたと思う。また、本研究会が新規会員の申し込みに繋がったことから、広域研究会の開催意義を果たせたと思いたい。ただ、個人的には、報告会の後で行われた茶話会形式の交流会で話に夢中になってしまい、地区委員として全体を見渡すという責務を果たせなかったことを反省し、次回に生かしたいと思う

報告者：小林浩明(北九州市立大学)



地区研究会のご案内

■ 関東地区研究会

日時：2019年2月23日（土）13時30分 - 16時（13時より受付開始）

場所：成城大学（<http://www.seijo.ac.jp/access/>）

8号館 831教室（<http://www.seijo.ac.jp/about/map/>）

※ 最寄り駅の成城学園前駅には小田急線新宿駅より「急行」をご利用下さい。

（「快速急行」は成城学園前駅には停車しませんので、ご注意ください）

参加費：無料

参加者の皆さんとシェアできるお菓子または飲み物（300円ぐらいまで）をお一人1種類お持ちください。

題目：「（多）文化（関係）研究の「砂場」づくりをしてみる」

講師：岡部 大祐 先生（順天堂大学）

お申し込みは以下のサイトよりお願いします。

<https://survey.zohopublic.com/zs/F3BUsp>

問い合わせ先： kantomulticultural@gmail.com

【話題提供者】

岡部 大祐 (OKABE Daisuke) 順天堂大学国際教養学部異文化コミュニケーション領域。

主な研究領域は（ヘルス/異文化間）コミュニケーション、談話社会心理学、社会言語学等。

【内容】

今回の地区研究会では、「演者と聴衆」という形式ではなく、全員参加で、（多）文化（関係）研究の「砂場」づくりを試みます。「砂場」をいう表現は、「アイデアを具現化する」「夢中になって遊ぶ」「たくさん失敗できる」「公共的」といった性質（他にもあるでしょうが）を示すために選びました。「砂場」づくりの足がかりとして、（1）「超文化性/融文化性（transculturality）」（Welsch, 1999）やモード論（Gibbons et al., 1994 小林訳 1997; サトウ, 2012）等のアイデアを確認し、（2）現代の社会課題の例としてグローバルヘルスの 이슈を共有し、全員で解決のための研究可能性を議論します。これらの「遊び」を通じて、「モードII」としての（多）文化（関係）研究を発展させるための「砂場」の在り方を探っていくという企画となります。上記のような、おおまかな流れの構想はもっておりますが、当日の具体的な流れは参加者次第で進めていくという、極めてゆるやかな形式で行う予定です。学部生、院生の参加も大いに歓迎しますので、社会的立場に関係なく、一緒に「おもしろいこと」を考えましょう。

引用文献

Gibbons, M. (Ed.). (1994). The new production of knowledge: The dynamics of science and research in contemporary societies. London: Sage. (小林信一他 (訳) (1997). 現代社会と知の創造：モード論とは何か 丸善ライブラリー)

サトウタツヤ (2012). 学融とモード論の心理学：人文社会科学における学問融合をめざして新曜社

Welsch, W. (1999). Transculturality: The puzzling form of cultures today. In Mike Featherstone & Scott Lash (Eds.), Spaces of Culture: City, Nation, World (pp. 194-213). London: Sage. 1999.

■中国・四国地区研究会

日 時：2018年3月17日（日）14:00～16:00 会場：岡山理科大学A1号館10階会議室

テーマ：臨床心理学的視点による多文化共生－外国人児童生徒のサポートを中心に－

話題提供者：鉄川 大健(ひろかつ) 臨床心理士

2018年度の中国・四国地区研究会は、3月17（日）に岡山市北区の岡山理科大学にて開催いたします。講師には、臨床心理士で異文化間の対人関係についてご研究されている鉄川大健氏をお招きし、異文化間カウンセリングをテーマに講演とワークショップを行います。

近年、日本の教育現場には留学生や在日外国人児童・生徒が多く所属するようになってきています。現在話題の外国人労働者の受け入れを拡大する法案に伴い、帯同家族として外国人児童・生徒の増加も考えられます。このような在日外国人のこどもたちは、日本に適応するために多くの困難を経験していくことは先行研究からも明らかになってきています。外国人のこどもたちと関わる現場の教師は、教育を行っていく教師としての困難に加え、彼らとの間に信頼関係や人間関係などの関係性を構築していく異文化仲介者としてのチャレンジにも向き合うことになります。

本発表では、発表前半において、多文化共生する中で生じてくる関係形成の難しさについて研究者の観点から紹介し、後半においては、日本人教師側が在日外国人学生との間で人間関係を形成していくために必要な視点について臨床家の観点からフォローしていきます。なお、外国人児童生徒とのより良い人間関係を形成していくために必要な視点については、発表者からの事例提供に加えて実際に教育現場で困難を感じている教師の方々からの話題提供も基にして、グループスーパービジョンを行っていきます。教育現場の先生方だけでなく、今後留学や仕事で異文化体験を予定している方にとっても、多文化共生について考えていく貴重な機会になることと思います。

文責：奥西 有理（岡山理科大学）

お知らせ

Web 管理・広報委員会より

《登録事項の更新をお願いします》

■会員専用サイトでの所属・住所等の変更

ご所属・e-mailアドレスなど会員登録情報の更新をお願いいたします。会員登録情報の変更は会員各自で行えます。登録情報を更新しなければ学会からのお知らせが届きません。登録情報に変更があった場合は更新をよろしくお願い致します。また、e-mailアドレスについては、現在使用されていないアドレスの方がいらっしゃいますので、今一度ご確認ください。なお、IDやパスワードがお分かりにならない方は出口（tdeguchi@jus.kindai.ac.jp）宛に御連絡下さい。

■登録情報の更手順

1. 多文化関係学会ホームページ (URL: <http://www.js-mr.org/>)
2. 学会員専用サイト (会員番号・パスワードを入力し、ログインボタンをクリック)
3. 登録情報更新をクリック
4. 変更点を修正し、一番下の更新をクリック

(Web管理・広報委員会委員長 出口 朋美)

学会誌編集委員会より

■ 学会誌編集委員会から「多文化関係学第15巻」発刊に関するご報告

学会誌第15号が完成いたしました。1月中には会員の皆様のもとにお届けできると思います。今号におきましては、秀逸な論文4本と研究ノート1本を掲載できましたことを、査読委員の先生方ならびに学会誌編集委員会のメンバー全員と共に喜んでおります。

いずれもフィールドワークやインタビューを通しての質的研究によるもので、異文化がせめぎあう現場を丁寧に分析あるいは描写しようとしているものです。充実した学会誌となりましたので、ぜひとも一読いただきたいと思います。

次号（学会誌第16号）は、例年通り投稿論文・研究ノートの受付を行います。次号への締め切りは4月30日（必着）となっておりますので、皆様、奮ってご投稿をお願いいたします。なお、ご執筆・ご投稿を検討いただいております会員の皆様におかれましては、査読および校正の作業を円滑に進めるためにも、執筆・投稿前にぜひとも巻末にあります「投稿規定」ならびに「執筆要領」のみならず、本学会誌は「執筆要領第5条」にありますとおり米国心理学会の規定に準拠しておりますので、これらをご参考にしていただけますようお願い申し上げます。

今年度は、編集作業の軽減を狙って、「投稿規定」ならびに「執筆要領」の大幅な改訂を行いましたので、特にご注意くださいと存じます。主な変更点は以下のとおりです。多文化関係学会のホームページもご参照いただければ幸いです。

- (1) 投稿資格および共著者の厳格化（投稿規程 第3条）
- (2) 研究の倫理性（投稿規程 第5条）
- (3) 図・表の文字数へ換算方法（投稿規程 第7条）
- (4) 投稿手続き（投稿規程 第9条）
- (5) 原稿の形態（執筆要綱 第2条）
- (6) 校正作業の注意点（執筆要綱 第12条）

最後になりますが、今後とも会員の皆様のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

■ 2018年度学会誌編集委員会

委員長	金本伊津子（桃山学院大学）
副委員長	原和也（明海大学）
委員	岡村郁子（首都大学東京）
委員	クリス オリバー（上智大学短期大学部）
委員	矢元貴美（上智大学）
委員	叶尤奇（椋山女学園大学）
委員	奴久妻駿介（一橋大学大学院）
委員（アドバイザー）	仲野友子（青山学院大学）

（学会誌編集委員会委員長 金本 伊津子）

事務局より

2018年はいつまでも暑い日が続いたかと思ったら、急に寒くなり、秋をあまり楽しめなかったのではないのでしょうか。皆様は紅葉は楽しめたでしょうか。

新体制になり、2年が過ぎようとしています。これからも事務局一同、皆様のお力をお借りしながら、事務局運営を行ってまいりますので、どうぞよろしく願いいたします。以下、事務局からのお知らせです。

■事務局所在地について

〒120-0023 東京都足立区千住曙町34-12
東京未来大学 モチベーション行動科学部
田中真奈美研究室内 多文化関係学会事務局
*Eメールアドレス admin@js-mr.org

■学会費の納入について

学会費納入をお願い致します。その際、払込料金（手数料）の支払いにつきましては、会員の皆様の方でご負担お願いいたします。

■会費納入状況に関するお問い合わせについて

お問い合わせは、会費に関する業務を委託しております**学協会サポートセンター** (scs@gakkyokai.jp)までお願い致します。その際、メールの件名は「多文化関係学会」とし、ご自分の氏名、会員番号、ご用件をお書きください。

また、退会希望の場合も、会費納入状況の確認と合わせて、**学協会サポートセンター**へご連絡ください。

■住所・所属などに変更について

大変お手数ですが、学会員専用サイトにログインし、**ご自分で情報を更新**していただくとともに、送付物の住所を管理している**学協会サポートセンター**にもご連絡ください

■学会ホームページ「学会員専用サイト」の会員番号とパスワードについて

学会ホームページ (HP) <http://www.js-mr.org/> では、登録情報の更新などを行える「学会員専用サイト」があります。情報の確認及び更新をお願い申し上げます。学会員専用サイトへのログインには、会員番号とパスワードが必要です。お忘れになった方は、**事務局** (admin@js-mr.org) までお問い合わせください。

■学会誌『多文化関係学』バックナンバーの販売について

学会誌の販売は、**株式会社インターブックス**に委託いたしております。学会誌バックナンバーのご購入をお考えの会員の方々は、恐れ入りますが、学会事務局ではなく**インターブックス**にお問い合わせください。

ホームページ : <http://www.interbooks.co.jp/>

メールアドレス : info_ml@interbooks.co.jp

電話番号 : 03(5212)4652 ファクス番号 : 03(5212)4655

なお、学会誌『多文化関係学』の論文は、論文検索サイトJ-STAGEにおいて順次掲載されております。

(事務局長 田中 真奈美)

新入会員紹介（敬称略、入会順）

会員資格	氏名	所属	研究分野 / 業務内容
一般	今井達也	南山大学	Interpersonal Communication
学生会員	張 暁紅	関西大学 総合情報研究科 総合情報学	教育
一般	秦 喜美恵	立命館アジア太平洋大学	Student Development/初年次教育、多文化協働におけるピアリーダー育成
学生会員	二子石 優	一橋大学大学院 言語社会研究科 日本語教育	留学生教育・日本語教育
一般	下村 冬彦	University of Washington College of Education Multicultural Education	異文化コミュニケーション、多文化共生、英語教育
学生会員	郷司 寿朗	広島大学大学院 国際協力研究科 教育文化専攻	元留学生外国人社員の社会統合
一般	シュレイダー・スティーブン	ノートルダム清心女子大学・英語教育センター	外国語教育・異文化コミュニケーション
学生会員	東平 福美		太平洋島嶼地域、遠隔教育、比較教育学
一般	神谷 純子	帝京科学大学	教育社会学
学生会員	片山 奈緒美	筑波大学 人文社会科学研究科 国際日本研究専攻	日本語教育、接触場面、コミュニケーション、翻訳
学生会員	ジュニ プトラ	九州大学 博士後期課程 地球社会統合科学	異文化コミュニケーション
学生会員	宮原 範	青山学院大学大学院 国際政治経済学研究科 国際コミュニケーション専攻	異文化コミュニケーション
学生会員	山元 庸子	九州大学 博士後期課程 地球社会統合科学科	日本語教育
学生会員	郭睿麒	山口大学大学院 東アジア研究科 博士後期課程 社会学	文化人類学
一般	坂井 伸彰		キャリア支援、キャリア教育
学生会員	アンディ ホリック ラムダニ	東北大学 博士課程後期1年 人間科学専攻宗教学研究室	多文化社会、宗教マイノリティ、国際社会
学生会員	曹 紅宇	山口大学 博士後期課程 東アジア比較文化	社会学 文化人類学
学生会員	宮寄 慧	九州大学大学院 修士2年 環境設計学科	多文化共生、コミュニティデザイン
学生会員	石井大智	香港中文大学 博士課程 Department of Japanese Studies	留学生政策/移民政策
学生会員	村川 永		異文化間コミュニケーション

（2018年5月1日から2018年12月31日に入会された方）

会員新著紹介

『Steps to Academic Presentations - アカデミック・プレゼンテーションへの第一歩』

著者：武田礼子、シミッチ・山下ミラ、八島智子

出版社：英宝社

出版年：2019年1月

総ページ数：72ページ

執筆言語：日本語

内容：2015年10月の年次大会で行われた特別企画「ラウンドテーブル」の指導内容を中心に執筆された英語プレゼンテーションのテキスト。学術的な発表に不可欠なAbstract の書き方、Chunking の記憶法、また発表後の英語での質疑応答なども含め、発表前および発表後の重要なステップにも言及している。プレゼンテーション初心者にはわかりやすいイントロダクション、また経験者にとっては自身の知識経験の振り返りに活かせるテキストである。

ニューズレター委員会より

■ 著作図書案内・書評・海外シンポジウム参加報告記事募集

ニューズレター委員会では、次回35号（2019年6月発行予定）掲載記事として、会員の皆様の著作図書案内、海外シンポジウム参加報告、震災関連や多文化関係学会に関連した研究、関連学会参加報告記事などを募集しております。以下（1）から（3）の記事をNL委員会に送ってくださいますようお願いいたします。

募集する記事の内容

（1）学会の趣旨に関連すると思われる著作・訳書などを出された場合

募集対象とする著作の発行時期：2019年1月から2019年4月末まで

書名、著者名、出版社名、出版年、総ページ数と本の内容を200字以内で紹介

（2）学会の趣旨に関連すると思われる著作で、会員に広く紹介することが望ましいと思われる場合

募集対象とする著作の発行時期：2019年1月から2019年4月末まで

書名、著者名、出版社名、出版年、総ページ数と本の書評を200字以内でまとめる

（3）学会に関連する海外のシンポジウムや震災関連のシンポジウム、もしくは関連学会に参加された場合

募集対象とする時期：2019年1月から2019年4月末まで

◆記事の送付期日：2019年5月6日

◆記事の送付先：NL委員会 内藤 伊都子宛 itnaito@ed.tokyo-fukushi.ac.jp

■ 関連学会の大会紹介記事の募集

会員に紹介するのにふさわしい関連学会の大会情報を随時募集しております。具体的には、（1）学会名、（2）大会名、（3）大会テーマ、（4）大会日時、（5）会場、（6）その他詳細（120字以内）をお書きのうえ、NL委員会委員長の内藤 伊都子宛 itnaito@ed.tokyo-fukushi.ac.jp に送ってくださいますようお願いいたします。

（NL委員会委員長 内藤 伊都子）

編集後記

ニュースレター第34号をお届けいたします。今号は、第17回年次大会特集となりました。大会準備委員長を務められました笠原先生（椋山女学園大学）や学生スタッフの方々が撮影されていた写真をご提供いただき、各企画のご登壇者の方々にも掲載のご承諾をいただくことができましたので、比較的写真の多い号となっております。会場の様子や雰囲気なども合わせてお伝えできればと思います。今後も地区研究会の様子や新書など、写真でご紹介できることがありましたら、ニュースレターに掲載させていただきたいと思っております。

次回年次大会につきましては、今号で日程および場所の予定のみしかお伝えすることができなかつたのですが、6月発行予定の次号には、詳細をお届けできればと思います。

(NL委員会：内藤伊都子・守崎誠一)